
奇怪なる夜話（壱）

財前太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

奇怪なる夜話（壱）

【Nコード】

N7729B

【作者名】

財前太郎

【あらすじ】

このパンツを履いた者は必ず成功する…。成功請負パンツを巡る物語「勝負パンツ」他、「悪魔の足音」「犬」など、奇怪なる夜話を掲載！

勝負パンツ（前編）

『失敗は成功のもと』……。
努力なしで成功はない……という意味です。
しかし、現実はどうでしょうか？
いくら努力しても、成功しない時は成功しない。
そう思いませんか……？

勝負パンツ（前編）

私は東京都在住のOL。
会社の中では、どうも成績優秀らしく、仲間からは憎まれ口を叩かれながらも、一目置かれている存在なのだ。

でも、一つ気がかりなのが……気が弱いこと。
何をやるにしても自身がないから、これといった特徴がない。というか、成功しなければならぬ時に、失敗してチャンスを逃すことが多いのだ。

そんな私に、わざわざチャンスを持ってきてくれたのは部長だった。

「お〜お〜、桐野くん！ちょっと……」

そう部長に呼び出され、私は会社の会議室へ行った。

「おつ、桐野君。実は……お願いがあるんだけどねえ……」

「……なんでしょう……」

「えっとねえ……来週、伊藤建設の社長さんが来るのは知ってるよ

ねえ……」

「はい……。それが、何か？」

部長は気色ばんで、私の方に向き直した。

「桐野く〜ん……わたしと一緒に……接待やってくれんかねえ……」
接待！？冗談じゃない！成功しない私に、そんな事が……。

「ねえ、桐野くん……やって……くれるよねえ……」

私は断ろうとした。でも、部長の一言で……。

「だいじょ〜ぶだよお……お礼はしっかりするから……」

部長は手で（2）の数字を作り、ゆつくりと横に振った。

「グフフ…… よんじゆうまん…… ボーナス出すからさ……」

「……分かりました」

つい言ってしまった！

「さっすが桐野く〜ん！よろしくねえ！……ただしい……」

えっ！？ただし？

「ただしい……もし失敗したら……」

もし、失敗したらあ……？

「……クビだからねえ……」

と言うわけで、重大な仕事を引き受けてしまった私。

むろん、失敗は許される訳が無く、かと言って、成功する自信がある訳では無く、とにかく私は、失敗しないための対策を考えていた。

そんな時、目に飛び込んできたのだ。

下着ショップ STRANGE

下着セール実施中！

*ヤセル下着！引き締まる！

*超高級ブランド商品！

*勝負パンツ

……勝負パンツ！？

まさか……お店のギャグだよね……。
でも……。

そう思いつつも、私はお店の中へと入っていった。

自動ドアが開くと、何人かの店員がいた。若い男の人が事務が一人、女性店員が数人、そして、店長らしき年配の男の人が一人いた。店長らしき男が、「いらっしやいませ」と言いながら私のところへ寄ってきた。

「どういった下着をお探でしょうか？」

「あのう……勝負パンツって……」
さすがに恥ずかしかった。しかし、店長は表情を変えることなくこやかに

「はい。勝負パンツでございますね。ありますよ」

そう言つて奥へ入つていった。

しばらくして、店長は奥から出て来た。綺麗な箱に包まれたパンツを3着持っていた。

「こちらが『勝負パンツ』になります」

パンツは3種類。左から順に、赤、白、黒だった。

「まず初めに……この赤い勝負パンツから」

店長は赤いパンツを手で差しながら説明を始めた。

「この赤いパンツは、ここぞ！という勝負の時、その成功を請け負う役を果たします。ただし、効果があるのは一回きりです」

へえ……勝負パンツって……そーゆー意味のパンツなんだあ…。

「そしてこちらの白いパンツ……」

白いパンツは、赤い方より高級そうに見えた。

「こちらの商品は、赤いパンツよりも一回多く、要するに2回まで効果があります。黒いパンツは3回まで効果を出すことができます」
なるほど。確かに、白は赤より、黒は白より高級そうに見える。
それだけ、効果も多いのか…。

「この……このパンツ……いくらでしょうか？」

店長の目がキラリと光った。

「赤いパンツは、10万円になります」

「じゅ……10万円!？」

高い!いや、それ相応の効果があるというのかしら!?

「白い方は15万円、黒い方は20万円に相なります」

やはり白と黒は高い。でも、赤ならなんとか変えるかも……。

「この勝負パンツ……10年に一度入荷するかどうかの品なので……」
悩んでいる私に対して、促すように店長は言った。

（もし、本当に効果があるなら……）

脳裡を過ぎるのは、20万円のボーナス、そしてクビになった自分の姿。もし今度の接待で失敗すれば、後者になる事は確か。しかし今の取捨選択で、どちらかになる事は確実だ。

（……よし……）

「買います!この赤いの……買います」

店長は微笑を浮かべ「ありがとうございます」と呟いた。

ついに私は、その『勝負パンツ』とやらを買ってしまった。

勝負パンツ（後編）

……よし。

私は赤い勝負パンツを履いて頷いた。ついに接待の日が来てしまった。もちろん失敗は許されるわけが無く、かといって、このパンツで成功する自信もない。

（大丈夫かな……）

鏡を前に考えこむ。不安だ。

私は服を着終え、化粧に入ろうとした。正直言って、化粧はあまり得意ではない。

「めーんどくさいなあ」

そう呟いた時、私の頭の中で何かが猛烈に回転し、意識する間もなく口紅やらパウダーやらをもの凄いスピードで顔に塗っていった。何なの！？一体！？

はっと我に返った時、鏡の映っているのは……私！？

確かに自分である。しかし、以前のぶっきらぼうな化粧とは違い、しっかりと、自然に、まるで“カリスマ”にやってもらったかのように、化粧がしっかりとしている。

そして……自分でいうのも何だが……キレイ！

申し分なく、美人と言っている。まるで女優みたい！

私は一気に自信を付け、宙を舞う気持ちで接待を行うレストランへ向かった。

私が着くと、すでに部長は到着済みで、服を整えていた。

「部長！おはようございます！」

「えっ……おは……よう！？」

やっぱり……。私を見て驚いている。

「きっ……桐野くん。どうしたんだい！？いつもの君とは違うぞお

「！」

「そうですね！？」

私は嘲るように言ってやった。こんなに自信に満ちているのは、人生で初めてだ！

「うーん。本当に見違えるように……あっ！」

喋っている途中、部長は急に私から視線をそらした。建設会社の社長が来たのだ。

「あっ！どうも、社長。お待ちしております〜！」

声を裏返ししながら喋る部長に対し、建設会社の社長はぶっきらぼうに頷くと、どすん！とレストランの椅子に腰掛けた。

部長は汗を拭き取り、私の肩を掴み小声で

「伊藤建設の社長さん……君も知っている通り、頭かったいんだよお

……」

……知らない。そんな事は聞いていない。

「はやくしてくれんかね！」

社長さんは怒るように言った。部長はもう一度汗を拭き取ると、資料を何枚か出して説明を始めた。

「えつとお……こちらが……そのお……」

部長はカミカミだ。挙動不審になっている。その度に伊藤建設社長の顔が強ばっていく。部長ったら、私にばかり言っておいて、結局は自分だって……。

そんな険悪なムード漂う中、集中力が切れた部長は私に対して

「たのむ〜」

と囁くと、目をパチパチさせ、必死に合図を出した。

（仕方が無いか……）

いつもの私なら、部長と同じく挙動不審になる。しかし……。

「こちらが今回の業務の詳細になります……」

そう言って、あたしが少し社長の方へ身を乗り出した。

すると……社長も、その隣にいた男性秘書も、まるで電撃が走ったようにビーンとなり

「あっ……なるほどお……すばらしい」

と何も言わぬ内から褒めだした。そして、今まで手すらつかなかったワインをガブガブと飲み始めたのだ。

（どうなってるの……？）

私が唾然としていると、いつの間にかワインは無くなり、社長が「すみませーん！ワインもう一本！」

と、まるで居酒屋にいるかのように叫んだ。酔ってるジャン！

社長は頬を赤らめながら、料理のステーキをつまみのように食べて言った。

「いや〜しかしね、君みたいに美人な子が部下にいる部長さんは、幸せだね〜」

「いやいや、とんでもないー！」

横合いから部長が口を挟む。

「いやでもね、本当に美人だよ。君。私ね、気に入ったよ。今回の仕事、君んちの会社に任せるよ」

え！？

というわけで、私の勝負はあっけなく「成功」してしまった。

接待が終わった後、部長の「さんきゅー、ボーナス約束するからねえ……」という言葉に勇気づけられ、私は改めて勝負パンツの力を悟った。すごいパンツだわ！

（このパンツ……高いお金出して買った甲斐があった！）

そう。その帰りだった。

私は見てしまったのだ。

……私には好きな人が一人いる。それは、社内でも人気者の「後藤」さん。その後藤さんが、同期の池田京子とキスをしているのを

…。

（そんな……）

くやしかった。とてもくやしかった。しかし、その時脳裡を過ぎ
ったのは、あの「勝負パンツ」！

（まてよ……勝負パンツを使って……）

私は下着ショップへ直行した。

先日と同じように、店長らしき店員が出て来て

「いらっしやいませ。いかがでしたか、勝負パンツは？」

「とても良かったです。もう一枚ください」

「……白でしょうか、黒でしょうか？」

「白……ください！」

店長は白いパンツを持ってきて

「こちらでございますね、お値段は……」

言い終わるか否かのうちに、私は15万円をドンッとカウンター
に置いた。

「……ありがとうございます……」

店長は静かに言つと、おじぎした。

よし……このパンツで後藤さんと……。

白い勝負パンツは、またしても私を「美女」に変えた。

後藤さんは美しくなった私が気になったのか、しきりに話しかけ
てくるようになった。それが原因か、池田京子とは険悪状態に見え
る。

とりあえず、私と彼はデートも頻繁にするし、親しい仲になった。
でも、なーんか物足りない。

（……結婚……かなあ……）

確か白いパンツの効き目は2回までであるはず。後藤さんと結婚で

きるならば、そんな幸せはない。

……よし、勝負しよう……。

私がもう一度白いパンツを履いた日、後藤さんは出勤途中に交通事故に遭い重傷を負った。

ということとは、看病するのは私だ。この事故のお陰で私と後藤さんの距離は急速に縮まり、ついをめたくゴールイン！

こんな最高の事って、あるのかしら！

名字を桐野から後藤に変えた結婚生活は、順調そのものだった。彼は会社の取締役まで出世し、私は壽退社をして主婦になった。昨日病院で子供が出来たことも分かったし、まさに「理想の家庭」ができていた。これも全て、「勝負パンツ」のお陰……。

そんな幸せの最中だった。あの事件が起こったのは……。いつものように、疲れて帰ってくる彼を、私は出迎えた。

「おかえり〜！あなた疲れたでしょう」

「……もうお終いだ！」

彼はぶっきらぼうに言った。

「お終いって……どういう意味？」

「……クビになったんだよ！」

まさか……そんな……。クビだなんて……。

「ウチの会社……インサイダーやってたらしい。上部は皆しょつ引かれた。俺はギリギリセーフだったけど、経営が傾いたから、人数削減のためクビだとよ！くそっ！」

「あなた……子供が生まれるのよ！もっともっと、お金がいるのよ！」

「うるせえな！」

彼は机を叩くと、ズカズカと寝室へ入っていった。

（そんな……そんな……）

ん？

私の脳裡をまたしても「勝負パンツ」が過ぎった。
それと同時にTVから流れてきたのは……。

一等3億円くじ 明日まで

これだ！

私はひらめいた。勝負パンツを履いてくじを買えばいい。3億円
当たれば、当分は生活できる。

考えつくと、そのまま下着屋へ直行した。

急いで駆け込むと、またしても店長らしき男がいた。

「すみません！勝負パンツ……勝負パンツください！」

店長は眉をひそめた。

「申し訳ございませんが……最後の一枚は、今し方売れてしまいま
して……」

えっ！？

衝撃……。でも、諦めきれない。こちらは人生がかかっている。本
当の勝負だ。

「いつ……いつですか？」

「お客様と入れ替わりくらいです。まだ出たばかり……」

店長が言い終わる前に、私は店を飛び出した。

（なんとしても……パンツを買った客を捜さなきゃ……）

一人……二人……辺りを見回す。

あつ！いた！

中年の女が、確かに下着屋の袋を引っさげ、歩いている。私は後ろから駆け寄り、袋さら奪い取った。

「ちよつと！ひったくり！ひったくりよ！」

女が叫ぶと、近くの交番の警官が駆けつけてきた。これでは捕まってしまう。

しかし、私には計略があった。

路地に隠れ、スカートをまくし上げてパンツを脱いだ。そして袋から黒い勝負パンツを取りだし、息をのんで履いた。

「おい！このひったくりが！」

私は現行犯逮捕…という形になったのか。警官にあっさりと捕まえられてしまった。

しかし……こちらには勝負パンツがある。どんな壁も越えられる。

私は警察署へ連れて行かれ、事情聴取を受けた。

聴取する警官の隙をうかがった。

外では雨が降り出した。雷鳴まで轟いた。……今だ！

警官が雷に目をそらした隙に、私はもの凄い勢いで逃げ出した。

「おい！こら！ちよつと待て！」

フフフ……私には勝負パンツがあるのよ！捕まえられるわけがない！

「待てッ！止まれ！」

私が逃げた道の先は行き止まりだった。そこは台所……。

「ふう〜…ようやく追いつめた…」

息を吐く警官に対し、私は戸棚にしまわれていた包丁を掴んで突きつけた。

「おいっ！冗談はよせ！やめろ！」

誰がやめるものか！こつちには勝負パンツがある。絶対勝てるん

だから！

「おいっ！やめんか！捨てる！捨てないと……」

警官は腰に付けた拳銃を抜いた。そんなもの、私に対しては無意味！

「捨てる…捨てないと撃つぞ！おいっ……」

ばっかじゃいの！？私は無敵よ！不死身！絶対成功するんだから！
私は包丁を警官へ振り下ろした。

ダーン！！

プルルル…プルルル…。

「もしもし、こちら下着ショップ……えっ！？……はい……はい……分かりました」

「どうした！」

「店長。どうも、『勝負下着』の黒ですけどね、普通の下着と間違えて出荷しちゃったそうです。だから、本物をお送りしますって……」
「そりゃ大変だ。買われたお客様にお詫びをしなきゃ……」

あれ………なんで………負けたんだろ………。

悪魔の足音

世の中は足音で溢れています。
ハイヒールの音…革靴の音…運動靴の音…
いろいろあります。
昼間に聞いても怖くはありませんが
夜の暗闇に聞くとどうでしょう？
こっーん…こっーん、と響いて…。

悪魔の足音

足音がした。

二つ聞こえる。双方は徐々に近づき、静かに止まった。虫も眠りに就いた、丑三つ時である。

「誰だ？こんな遅くに……」

一方から、男の声がした。が、それに答える声は無い。

「泥棒か、強盗か？それとも、殺し屋か？」

しかし、また返事は無かった。

男は痺れを切らし、灯りを手に足音のした方向へ歩き出した。

すると、もう一つの足音も、合わせるように遠ざかってゆく。これではきりが無い。

男は走り出した。と同時に、足音も走り出した。「まてっ」と叫びながら、必死に追いかけた。灯りが揺れる。

二つの足音が、廊下に響き渡った。男の心の中では、犯人をかくこよく捕まえた時の自分の姿が浮かぶ。

いよいよ、期待は膨らむ。後少しで追いつく。階段に差し掛かった時、一瞬犯人の姿が見えた。しめた！わっと高く、階段から飛びかかった。犯人を押さえつける、勇敢な自分の姿を想像しながら……。

ドンツという、鈍い音。男が飛びかかったのは、一体のマネキンであった。

「マ……マネキンが……動いた！」

なんと哀れな男なのだろう。自分の足音が、静かな夜に響いていくとも知らずに……。

悪魔の足音（後書き）

この作品は

2006年7月14日に

「悪魔の足音」として

掲載されました。

奇怪なる夜話（壱）

犬

ペットと言えば、犬。

私は犬を思い浮かべますねえ。

犬と人間との関わりは

実に縄文時代以前からという説もあります。

現在も昔も変わらない存在

それが：犬。

犬

「犬が欲しい！」

翔太の入学祝いに何か買ってやる、と私が言ったのに対し、彼は
そう答えた。

犬か…。

昔飼っていたが、やはり生き物である。そして人間より寿命は短
い。死んだ時は悲しかったなあ…。

しかし…だ。入学して1ヶ月経たないうちに、家内と翔太は交通
事故で死んだ。

つらかった。翔太の笑顔が頭に焼き付いて離れなかった。

どんな姿で死んだんだろう。痛いって叫んだのか。叫ぶひまも無
かったのか。

翔太と家内の葬式やらが済んで、辺りは静寂を取り戻した。
そんな静かな晩だった。

一匹の犬が現れたのだ。クロと茶色と白が混ざった耳の長い犬…。
「クロ……？」

思わず目を疑った。そんなはずはない。クロは私が小学生の時に
死んだはずだ。

しかしクロは私に近寄ってくると、湿った花を押しつけてしっぽ
を振った。

……クロだ！

クロは、私が仕事から帰ると、小屋から出て来て「ハッハッハ」
と息を履きながらしっぽを振る。

正直言うと、私はクロに癒されていたのかも知れない。
私の悲しみを、クロは受け止めてくれた。嫌な顔一つせず、受け
止めてくれた。しっぽを振ってなくさめてくれた。

そのお陰か、私の悲しみは幾分か癒えたかに思える。手つかずだ
った仕事もできるようになり、メシも食えるようになった気がする。

心が軽くなった俺は、久しぶりに散歩に出かけた。クロと一緒に
梅雨から抜けて、空は晴れていた。雨の滴が輝いている。

「なあクロ」
俺はどすりと腰を下ろした。クロもちゃんと座った。

心地よい風邪が吹いている。草がさわさわと音を立てて笑う。

「なあクロ……」
もう一度言ってみた。クロは俺の方を向いた。かすかに笑ったよ
うにも思える。

クロは走り出した。

ほんの近くへだが、私はクロが遠くへ行ってしまうように感じた。

奇怪なる夜話（壱）

クロは止まった。

「クロ……」

私はもう一度言った。クロは振り返った。ふと、空を見上げた。太陽が燦々と輝いている。

目を戻した。クロはいなかった。

そっだよな……クロがいる筈がない。

クロは一昔前に死んだんだ。

「クロ……」

眩してみた。クロはもういなかった。

すっつと涼しい風が、私の横を吹き抜けた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7729b/>

奇怪なる夜話（壱）

2009年7月3日19時03分発行